シンデレラガールズ 習作短編集

らいぶん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある事務所の日常を書く習作です。

基本的に女の子どうしの仲がとても良かったり、ちょっとえっちだったりするかもしれません。

【新作】頼子さんとふみふみのＳＳ書きました【よりふみ】

目次

二人を取り巻くエトセトラ（前編）　1
二人を取り巻くエトセトラ（中編）　9
二人を取り巻くエトセトラ（後編）　16
彼女の涙と2人の誓い　――――　24

二人を取り巻くエトセトラ（前編）

「いい加減にしてっ！」

悲鳴に限りなく近い怒声が、穏やかな午後の談話室の体感温度を氷点下まで引き下げた。

怒声から遅れること数秒、談話室から【自主練室】につながる通路から現れたのは、普段着としては最低限の身なりを慌てて整えたような速水奏であった。

普段の彼女からして想像も出来ない程の早足で談話室を抜け、そのまま事務所につながる通路へと姿を消した。あの怒声から鑑みるに、相当ご立腹であることだろう。

談話室の住人と化していたアイドルが数人程野次馬根性で、或いは彼女心配してか後を追ったが、怒りを纏う奏に邪険に扱われて帰ってくるであろうことは想像に難くない。

それから遅れること数十秒、這い出るように【自主練室】から出たのは、談話室の住人の凡そ半数の予想通り高垣楓だった。

こちらは酷く気落ちした様子で、着る物すら碌に付けていない。

談話室の住人たちの反応は大別して2つ、困惑と心配を浮かべるのはこの状況に慣れないアイドルが多く、対処に困り周囲を伺った。対して楓の起こす度々の騒動に慣れてしまったアイドルたちは、「オチが読めた」とばかりに我関せずを決め込んだ。

そんな中、心配したように自分の上着を脱ぎ、楓に掛ける情に篤い者もいた。尤も、彼女は大別すれば後者に類されるアイドルであり、声色こそ心配していたが視線は呆れの感情を多分に含んでいたが。

「奏ちゃんいつになく機嫌が良くなかったけど…楓ちゃん、今度は何やったの？」

あからさまに関わりあいたくない案件に勇敢にも踏み込む川島瑞樹の英雄的行為に、談話室の住人は俄に彼女の評価を上げた。

「それが…シてるときに別の女の名前を出してたみたいで…」

瞬間、楓に刺さる視線がかたちを変える。彼女の女性遍歴を知らぬアイドルたちは驚愕と侮蔑の色へと変え、それを知る、或いは彼女に手を出された経験のあるアイドルたちは「そんなことだろうと思った」とばかりに呆れの色を一層強めた。

「あー…やっちゃったわねぇ。この業界で人付き合い長くなるとたまにやっちゃうわよね…わかるわ」

いつもなら彼女を咎める瑞樹が、頭を抱えながらも同意を示す。数秒を置き、神妙な表情を作ると

「とりあえず一つだけ確認させて頂戴ね、ヤってる最中に出した名前って…私じゃないでしょうね？」
「違います」
「……はぁー、良かった。今度奏ちゃんと一緒のお仕事なのに、雰囲気悪くなっちゃったら大変だったわ」
まさかの自己保身であったが、情事の縺れを仕事に持ち込まないプロ意識と気付いた談話室の住人たちは、瑞樹の下げかけた評価を元値以上に釣り上げた。
「それで、どうするのよ楓ちゃん。奏ちゃんとのお仕事、確か明後日でしょ？」

今後の関係に悩む二人の会話を聞きながら、談話室の住人の一人と化していた八神マキノは静かにメールアプリを開き、たった今入手した情報を送った。宛先は、古澤頼子。『ミステリアスアイズの痴話喧嘩を聞いたありすちゃんが恐らくそちらに向かう。彼女は詳細を確認しなかったし、裏の顔も知らないと見える。上手いこと導いてあげなさいな。』
『何故、私だと思うんですか？』
先んじて送った情報から予測を立ててあったのだろう、流石に返信が早い。そして、理由はただ一つ。

『彼女から憧れを一身に浴びる我等が最年長様が、そういう事柄に聡いと思って？』

マキノと頼子、そしてもう一人。読書の秋ＰＲキャンペーンからすっかり定着したそのユニット名をオータムブックメイトという。そしてそのもう一人、鷺沢文香こそがマキノの目下の悩みの種なのだ。

彼女が思いを寄せるユニット最年長の顔を思い浮かべているのだろうか、返信が遅い。事実、彼女たちの仲に進展がみられない要因の半分は、文香の致命的な鈍感さに由来するのだ。そしてもう半分は…

『…プロデューサーさんに確認を取って欲しいことがあるんですが…出来れば事前許可も』

そのままプロデューサーも交えて事前打ち合わせを行いながら、マキノはふと思い起こす事があった。

マキノは以前、頼子が演じた怪盗こそが彼女の本質であると考えていた時期があったが、今にして思えばとんだ読み違いあった。

マキノが見出だした古澤頼子の本質、それは謀略家。一を聞いて十に膨らませ、百の策を作り千を動かす。

故に一を聞かせる立場であるマキノとは馬が合うし、こうして良きビジネスパートナー足り得ているのだ。

しかし、それ故に目に余る物もあるというもの。いつのまにか思考が擦れ、入力していた文字にまで影響を及ぼす。
『どうしてそのアタマを使って文香を落とそうと出来ないんだ、ヘタレめ』
マキノは思わず打ち込んでいた頼子への文句を全て消し、ありきたりな礼文を送り付けてメールでの会話を打ち切った。

誰に知られる事もないやり取りから時を進めること凡そ１０分、古澤頼子と橘ありすは人通りの少ない通路で予定通り落ち合った。
酷く焦った様子のありすが考えている事など、マキノからの事前情報がなくても手に取る様に見えた。
「それで、楓さんと奏さんの仲をどうにか取り持ちたいと」
「と、取り持つというのは少し大袈裟ではないでしょうか？お二人とも私にとっては大人の女性として尊敬していますし、仲が良くないことは、誰にとっても良くないことです！」
実際には仲が悪いどころではなく、それの和解を口実に夜の友好を更に深める為のスパイスでしかないと知る頼子であったが、彼女はそれをおくびにも出さず努めて穏やかな表情を作ってありすを宥めた。

「ありすちゃんは優しいですね」
　そう言いながら頭を撫でると嬉し気な表情を浮かべるが、慌てて（少なくとも本人としては）それを消し、咳払いで仕切り直した。
「もう、頼子さんまで子供扱いしないでください！」
「ごめんなさい、それで、何故私なんです？他に頼りになりそうな人ならこの事務所には幾らでも…」
　するとありすは少しばかり言い辛そうに言葉を濁すと
「最初は文香さんにとも思ったんですけど、文香さんは恋愛に関してはあまり興味を持たれないと先日知ったので、頭が良くて文香さんと親しいという部分で信頼出来る頼子さんならと…」
　直言家と言うべき普段の彼女からは想像も出来ない程、ありすは慎重に慎重を重ねて言葉を選んでいた。
　文香と親交が深い頼子が不快にならない様に、何よりここに居ない文香に極力失礼にならない様に言葉の取捨選択をしながらその上で頼子の反応に怯えるとなれば、自らの思い人から清流のようと称された彼女の言が淀むのも頷ける事だった。
「…文香さんには内緒にしておきますね。さて、少しお時間を」
　言うなりありすに背を向けて電話をする頼子。直ぐに終わらせると再び向き直る。

「マキノさんにお二人のスケジュールを確認してもらいました。今日はもう予定がなく、明日は丸1日オフの様です。

1日を険悪なままで過ごすのはお二人にとっても辛いでしょうし、ここは一つ、プロデューサーさんにこういった提案をしてみては如何でしょうか」

これから提案をされる当のプロデューサーとも協力の元、綿密に立てられた計画をさも今思いついたと言わんばかりの表情で披露する。まるで小さな劇の様だ。

ありすは予測された通りの反応をしながら勇んでプロデューサーに電話をかけている。彼女はありすの言う提案に驚くも、最終的にはその案に賛同し協力を約束した。

尤も、事前の打ち合わせの時点でプロデューサーは計画を知っているし、支援を惜しまないことを確認済みなのだが。

直前にマキノの名前を出しながら彼女に連絡を取っていたのも、全ては致命的に間が悪いプロデューサーがやらかすリスクを極力抑える為であった。

「二人には私からお願いしておくから、上手くやるんですよ。ああそうそう、それから頼子ちゃんとマキノにも宜しく伝えておいてください。あっ」

やはりやらかした。大方、切る直前で此方との関わりを内密にする手筈だった事を思い出したのだろう。

ご丁寧にマキノの名前まで出してくれた。お蔭で余計な仕事が一つ増えた。

「との事です。頼子さんは勿論ですけどマキノさんの事まで…」
「…全てお見通しという訳でしたね。流石は私たちのプロデューサーさんです。」
幸い、想定されていたやらかしの中では最も誤魔化しやすい部類だったので事なきを得た。
「やっぱりプロデューサーさんは凄いですね！勿論頼子さんやマキノさんもですけど…すいません、一つ質問いいですか？」
穏やかな笑みでありすの質問を許可する頼子の余裕は、ここで遂に崩れる事となる。
「……こんなに頭が良いのに、なんで文香さんに告白しないんですか？もしかして…ヘタレなのでは」
「うっ」
純粋無垢とは単に誘導しやすいばかりの相手ではないことを、思わぬ反撃を受けた頼子は身を以て知ることとなった。

（続く）

二人を取り巻くエトセトラ（中編）

速水奏と高垣楓が紆余曲折を経て【自主練室】で行為に及ぶような仲になってからというもの、二人は暇さえあれば口と体、なにより心でのやりとりを楽しんだ。

さすがにデビュー以前から【自主練室】に入り浸り、遂にはトレーナー代理として鍵まで預けられるまでになった三船美優と和久井留美の万年熟年夫婦程ではないにしろだ。

昼は言葉と仕事の成果で、夜はその体で優劣を競ったこともあれば、オフの日など丸1日相手の趣味に付き合い心を通わせる過程を楽しむこともあった。

ともかく、それぞれ別方向に濃い性格の二人が付き合いだして以降決定的に拗れる事がなかったのは、「二人だけの時間はお互いだけを愛する」という最初に二人で取り決めた唯一の約束が守られていたからであった。

それが今日、いとも簡単に破り棄てられたとあっては、奏が怒り心頭になるのも当然の話である。

尤も、奏の頭脳は既に冷静を取り戻しつつあり、代わりに湧きあがるのは今晩と明日丸1日、楓をどう屈服させ、反省させるかという嗜虐的なものばかりだ。

そこに水を刺すのは一通のメール。プロデューサーからの業務連絡であった。

『明後日の二人のお仕事を見学して後学の糧にしたいとありすちゃんが言ってるけどどう？楓さんは問題無しだってさ。

奏ちゃんも問題無いなら打ち合わせの為にこの後ありすちゃんが実家に招きたいって。両親は不在らしいし、明後日は普通に出勤すること。

追伸　また何かトラブル起こしたんだって？ありすちゃん物凄く心配してたから、二人で仲良しアピールして不安を解消してあげなよ。』

問題無しの返答を送りながらも、奏は頭脳を巡らせる。ありすの前で楓を弾劾し吊し上げるのはプロデューサーの気遣いを無下にするし、何よりありすの教育に良くない。

言外に泊まる許可こそあれど、夜の楽しみはお預けになりそうであった。

奏が橘家の邸宅を訪れたのはこれが初めてという訳ではない。複数の共演を経て友好を深めるうちに、お互いの家に泊まりに行くことも珍しい事ではなくなっていた。

しかし、楓も居るとなれば話は変わってくる。ありすをはじめとした橘家の皆さんにご迷惑をかけていないことを祈る他無かった。

インターホンを鳴らすが反応がない。やはり楓がなにかやらかしたかと思うと、当の本人が現れ奏を家に引きずり込んだ。
「奏ちゃん、いいところに。助けてください！」
「待ちなさい、色々聞きたいんだけど、ありすちゃんはどうしたの？」
急かす楓に背を押され、リビングに入った奏はその惨状に言葉を失った。
テーブル一帯の床には液体を拭った痕跡があり、アルコールの匂いは多少薄まっている。下手人は楓が持ち込んだであろう酒瓶だ、ここまではいい。
何故その下手人がソファに胡座をかいて座る家主一家の娘に抱えられているのだ。その上、こちらを睨む眼光は鋭い。
大方フローリングの溝に躓いて酒を浴び、アルコールに当てられたのだろう。
「奏さん遅いですよ！折角楓さんを反省させてたのに本人が居なかったら話にならないじゃないですか！」
「……楓、貴女ありすちゃんに怒られてたの？」
思わず二人の時だけと取り決めた呼び捨てを使うが、そんな事に気を向ける程今宵のありすは冷静ではなかった。
「楓さんったら酷いんですよ！色んな女の人とえっちなことして、もう何人とえっちしたか忘れたって言うんです！

事務所の人達ともえっちしたって言うんですよ！」
言葉を区切る旅にソファーに酒瓶の底を叩きつけ、内包物が宙を踊る。楓が悲しげな表情を浮かべるも、それすらもありすの憤怒に薪を燃べるだけであった。
ありすは余程アルコールに弱いのか、冷静で鋭利な思考を目標として掲げる彼女とは思えない程に正体をなくしていた。飲んだ訳でもなく、浴びたアルコールだけでこれとは酒乱の才能があるのではなかろうか。
これはプロデューサーを通して健康診断でアルコールテストを行う様に進言するかとも思いながら、口では赤ら顔で睨みを効かせるありすを宥めようと画策する。
「あらあら、レディがえっちえっちと連呼するのはどうなのかしら。少し落ち着く事よ。」
「奏さんも奏さんですよ、何を他人事みたいに言ってるんですか！
楓さんから聞きましたよ、昼間のお二人の喧嘩、えっちの最中に楓さんが奏さんを怒らせたからなんですね!?」
余計な事を洩らしたなと恨みの籠った視線を楓へと送るその前に、二人とも、ここに正座してくださいと言うありすの威圧感に負け、ソファの前に肩を並べて正座する。
「楓さん、いつも奏さんとどうでもいいことで喧嘩したり勝負して、それに託つけてえっちしてるんでしたよね。」

「…それは、その…はい。」

楓の肯定を見たありすは大仰に呆れた様な仕草を取ると

「楓さん、私が今日の昼から話を聞くさっきまでの間、どれだけお二人のことを心配していたかわかりますか？

私だけじゃありません、瑞樹さんや談話室に居た皆さん、【自主練室】の美優さん留美さん達だって、お二人の心配をしてくださったんですよ！

今日だけじゃありません、瑞樹さん達はお二人のえっちのための喧嘩や勝負に、毎度毎度付き合わされて振り回されてきたそうじゃないですか！自覚してますか!?」

堰を切ったが如く、止めどなく続く正論の数々。それを一回り以上年下のありすから言われるのは流石の楓でも堪えた様で、神妙な顔で項垂れる他無い。

続いてありすは奏に顔を向ける。

「楓さんが色んな女性とえっちしてるのは周知の事実だそうですし、奏さんも知ってたんでしょう？笑って流せる問題ではないでしょうけど、少なくともここまで大事になったのは奏さんの反応のせいではないですか？」

否定の余地が無かった。

更に自己分析を付け加えるなら、談話室を通り抜けたのも良くなかった。あれによって今回のトラブルを衆目に晒す事になったのは間違いないのだから。

しかしこちらにも言い分はある、そう奏が口に出す前に、ありすは更に畳み掛けた。
「そもそも、奏さんは悔しくないんですか？
何処の誰の名前を出したのか私は知りませんし知りたくもありませんけど、奏さんとえっちしてる最中の楓さんが思い出すくらい思い入れのある人でしょうね。
何で自分じゃなくてその人なんだって欠片も思わなかったって言えますか？
…悔しくないんですか。」
だめ押しの問いが、奏が一度は押し込めた楓への憤りを再点火させた。
「…悔しいわよ、悔しくないわけないじゃないの！
二人の時はお互いの事だけを考えるって約束とか、よりにもよって事の最中にそれを破ったこととか、そもそもその人は何処の誰なのかとか、言いたいし聞きたい事はいくらでもあるのよ！」
悲鳴に限りなく近い怒声でありすに返すと、ありすは満足気に頷くと立ち上がる。
「じゃあそれを今から楓さんに聞いてください。
私は空気が読めるのでシャワーでも浴びて時間を潰します。ベッドは私の部屋なり客間なり好きなところのを使ってください。」
言うが早いか、ありすは部屋を後にした。最後まで酒瓶を抱き抱えながら。
結局、リビングには気まずい空気のまま隣合って正座する二人が残された。

「…客間を借りましょうか。」
「…ええ、そうね。流石にありすちゃんの私室を使う訳にもいかないでしょう。」
そうして奏は、漸く楓との夜の楽しみにありつくことが出来たのだった。

（続く）

二人を取り巻くエトセトラ（後編）

「…白状しますと、名前を出した女（ひと）は私の昔の人です。ですので、少しばかり昔語りに付き合ってもらえませんか。」

二人が一勝負交えた後、そう切り出した楓は、事の発端となった女性と自らの関係を語った。

楓が芸能界に入ったのは高校時代、地元和歌山でモデルとしてスカウトされて上京したときであったという。

そのモデル事務所の先輩であり、おのぼりさんであった楓の教育係が件の女性というのが楓の弁解だ。

「美しく聡明で、何より気丈な人でした。何処の誰とも知らない、引っ込み思案で臆病者の私に、根気よく丁寧に仕事や芸能界のイロハを教えてくれました。」

その心地好い関係性が変わったのは楓が二十歳になった日のこと、社長が相手先への枕営業を指示してきたという。楓の性格と美貌に目を付けたものの、二十歳になるまではと枕営業をやらせないでいた、感謝しろというのが社長の言い分だったそうだ。

「結局代わりに彼女が枕には行って、週刊紙にすっぱ抜かれて会社は倒産。私と彼女は別の会社にモデルとして広われましたが、半年後に妊娠が発覚した彼女は逃げる様に芸能界を去りました。私が彼女と寝たのは、彼女が枕に行く前日…それが最初で最後でした。」

初恋の女性であり姉の様でもあった彼女を失った悲しみと失意の底にあった楓の生活は、みるみるうちに堕落したものとなった。

仕事中でも構わず彼女の好きだった銘柄の酒や煙草を浴びる様に摂取しては思い出に浸り、夜は失くした温もりを探すかのように手当たり次第に女を抱いた。

幸か不幸か、この容姿である。相手に困る事は一度として無かった。私の取り合いから不仲を起こし、私が居なくなったと共に空中分解した会社や現場は両手の数では足りませんね等と宣う楓を、奏は労る様に撫で抱えた。

「自虐も大概にしないと、その綺麗な口に蓋をするわよ?」

「あら、ではお願いして…」

長く濃厚な口付けを存分に堪能すると、再び楓は語る。

「そうして暫く経った頃、彼女から連絡がありました。時間があるなら合えないかと。

私が待ち合わせ場所に行くと、そこには少し窶れた、でも目だけはあの頃のまま気丈に振る舞う彼女の姿がありました。」

無事出産した彼女は育児を進めながらモデル時代の人脈を生かし、新しい仕事に試行錯誤していた。

そして彼女の目はこうも言っていたという。「貴女はそのままでいいのか、って」

「教育係をしてもらっていた頃に一度だけ怒らせてしまいましてね、あの時と同じ目をしていました。」

あの後は心を入れかえて、少なくとも仕事中は真面目にやるようにし、元々得意でもなかった煙草もすっぱりとやめた。酒と女遊びは本来の性だったのか、生活の一部として定着していたが、それでも限度は弁えていた。

「それで、この会社のモデル部門に雇用されて…色々あってアイドルに転向しました。」

「待って。やっぱりそこがおかしい。

色々って何なの。今まで何度も聞いた事務所入ってからの話、毎回色々って言って誤魔化すわよね？」

奏は楓の言葉を見破らんとして楓を睨むが、楓にはそれが甘えがる様に見えて仕方がなかった。

「まったく、次は私が語る番って訳ね。」

楓の揶揄う様な表情に、これは手の内を明かさないと話を進めめない気だと悟った奏

は、致し方ないと一息呼吸置くと話し始めた。

「以前言ったと思うけど、私がこの業界に入ったのは貴女が切っ掛けよ、楓。

貴女のモデルとしての姿に憧れて、いつかその隣に立ちたいと思ったのが最初の一歩。ここでアイドルになったのだって、全くの偶然。漠然とここで社会的知名度を手に入れて、貴女のいる何処かの会社に移る気で居たもの。」

だからこの事務所に貴女が居ると知った時は驚いたし、アイドル部門に転向したと聞いた時の驚きはそれ以上だったわ等と話す奏に、楓は微笑みを大きくする。その表情は、まるで子供への種明かしを今か今かと待ちわびる手品師とよく似ていた。

「では、もっと驚いてもらいますね。

…私がアイドルになった理由が奏ちゃんだったとしたら?」

「……貴女、駄洒落よりもマシなジョークを持ってたのね。」

あっ信じてませんね?と笑う楓の顔を直視出来ない。話を反らして稼いだ僅かな時間では、現実逃避から復帰することは出来なかった。

「奏ちゃんを初めて見たとき、彼女に似た雰囲気の娘って感じました。でも、奏ちゃんのライブを見て違うとも思いました。

気高く振る舞いながらも繊細で臆病な奏ちゃんは、彼女よりも寧ろ私に近い人間なんだって。理想だけを求めて、理想に追い付くことに必死な奏ちゃんと同じような目を、

私はしていた時期がありましたから。」
「楓…」
　奏の口から零れた様に楓の名が呟かれる。それが合図だったかの如く、二人は無言で抱き合った。
「もしも奏ちゃんの目標がなくなってしまったら、貴女まで私の様になってしまう…そう考えると、過去の自分を見ている様に思えました。
　だから、貴女を支える何かの様に、或いはその何かと一緒になって、貴女を支えてあげたい…そう思ったんです。」
　まさか自分がそう思われているとは露知らず、滑稽な一人相撲でしたと自らを嘲笑う楓を抱き締めながら、奏は楓の胸に顔を埋めた。
「それなら私もそう違ってはいないわ。貴女の心中を知らずに一喜一憂してた私の愚かさは、貴女への無理解から来るものだったね。」
「やっぱり私たち、似た者同士みたいですね。ふふっ。」
　二人は笑い合い、泣き合い、抱き合い、そして愛し合った。

　一方その頃、ありすはと言えば、身を清め気持ちを入れ替えたつもりでいたが、同時に今までの言動を振り返り肝を冷やしていた。

お酒を浴びて匂いにやられたとはいえ、お二人に対して失礼な言動であったのは明白であるし、その…卑猥な言葉を何度も口にした覚えもある。一先ず自室で着替える前に、客間の様子を見よう。

流石に自室をじゃあ遠慮なくと使う程ふざけた人達ではないが（レイジーレイジーのお二人じゃあるまいし）、客間に居なかったらまた考えよう。

自らの不注意で酒瓶の中身を浴びたことといい、今日のありすは尽く災難であった。

ありすの本日最後の災難の切っ掛けは、自宅であり油断しきっていたということだ。普段ならやらない、タオルを巻いただけの状態で歩き、ましてやその姿で楓と奏が愛を重ねているとは夢にも思わずに客間に入ってしまったのである。

「あっ」

「「あっ」」

ありすが未だ幼いとはいえ、芸能界の一員である。ありすは最低限の性教育を事務所の先輩アイドルから施されているが、多くの大人アイドルが参加する【自主練室】でのハニートラップ対策自主レッスンは参加年齢に到達していない。

余談になるが、ありすはハニートラップ対策自主レッスン等という言い訳めいた名目の下で性行為に及んでいるであろうことを大方推測しているし、事実【自主練室】はそういう目的の部屋である。

つまり、そういう状態の二人がどういう存在なのか、伝聞でしか知らなかった。この二人が一人の獲物を共同で狙った時、逃げられた者は一人として居ないという事実を。

楓が雰囲気で圧倒し、奏がキスで物理的に封殺する。そうして心身の与奪を掌握した二人は、獲物となったありすで散々に遊び、屈服したところでとどめを刺すように貪り尽くすのだ。

本人も言う様にこの二人、似た者同士であり、組んだ時の相性が良すぎた。その上、お互いの意図を読んだ上で相手を責める為に対処も困難と来ている。

お蔭で【自主練室】では多人数レッスンでこの二人が組むのを原則禁止、二人が体を重ねている時にちょっかいは厳禁と取り決められる程だ。

つまり、自分から二対一の構図を作ってしまった時点で、ありすの貞操は失われたも同然であったと言える。

その後、彼女たち三人のけだものは丸一日、調理と食事と買い物以外では常に愛を絡める爛れた時間を満喫する事となった。

当然ながら、ありすの処女はいとも容易く失われた。

数日後、プロデューサーからの業務連絡にて。

『楓さん、奏ちゃん。

事務所内の風紀遵守の為の規則第４条９項１３号『中学生以下の所属職員に対する性的接触に関する規則』の接触で最大半年の減給ね。

減額度合いは専務と、ありすちゃんの親御さんと話し合って決めるから覚悟しておいて。』

【自主練室】でのレッスン中であった事も忘れて項垂れる二人のけだもの。

けだものを制御し管理するのは、いつだって人間の役目であった。

（完）

彼女の涙と2人の誓い

今年度のシンデレラガール総選挙の無事成功を祝した賑やかな祝賀会が宴会の様相を呈するのに、さして時間はかからなかった。

発表会場から祝賀会場へと姿を変え、現在は宴会場に転身した事務所のホールでは、各々のテーブルで思い思いに仲の良いアイドルが集まり、何人かは人の間を抜けて他のテーブルを渡り歩く姿が見てとれる。

例を幾つか見よう。

完全に出来上がった様子の第６位を隔離するように成人組が壁を作り、その中ではいつも通り人身御供となった第７位が被害を押さえるべく孤軍奮闘している。

他方、早くも喧騒に飽きだして自身の城たる研究室に籠ろうとした第２位は、恋敵たる京美人の手で椅子に拘束され、共通の恋人が嬉々として演じるさして面白くもない野球物真似を延々と見せられる羽目になっていた。

第３位と第１０位の少女達は、それぞれの恋人である第３４位と第１９位によって今までの苦労話、裏話、かわいいところ、かっこいいところ等々を延々と朗説され、両者共に赤面を隠せない。

有り体に言って混沌としていた。

そんな混沌の中心部にて困惑する少女が1人。

「……何故、どうして私がここに居るのでしょうか…」

右を見れば今年のシンデレラガールに選ばれ、すごいですすごいですと持ち上げる妹分や熱血乙女に照れながらも満更ではなさそうな鷺沢文香。

振り替えるとパフェを食べる特別オーディション第3位八神マキノ。口に運ぶ合間に度し難い度し難いと言いながらも言葉よりスプーンが進む様で、やはり彼女も相応に舞い上がっているらしい。

そんな両者に挟まれた少女の名は古澤頼子。トリオユニット、オータムブックメイトのメンバーである。

彼女が何故このような状況下におかれているのかは、少しばかり時間を遡る必要がある。

この会場でシンデレラガール総選挙の結果発表が行われたのは今から凡そ1時間前のことだ。

ステージ上でユニットメンバー達の大躍進を笑顔で見届けた彼女は、以前から感じて

いた差が更に大きなものになった事を悟った。
苦悩、屈辱、焦燥、色々な感情が渦巻き、それらに振り回されそうになる。
それらを相手に孤独に抗うだけで時間は過ぎ、いつの間にか発表は終わり、撮影機材は撤収していた。
社長や協賛企業代表参列者の短い賛辞の後、事務所アイドル部門の責任者の音頭で始まった祝賀会。
撮影スタッフや他の社員達もプロデューサーやトレーナーと懇談しており、時折今後の業務の話題も混じるのは職業病と言ったところか。
他方、当事者たるアイドル達はといえば、『恨み妬みは後に持ち越さない』という社是の下、今日まで溜めに溜めた鬱憤を抜く作業に勤しんでいた。
年少組は５０位以内入賞おめでとう、ありがとう、来年もがんばろうねと称賛や涙混じりの励ましあいが各所で見られ、大人達はといえばレッスンや減量とは無縁の１日を満喫すべく酒食の肴に苦労語りを並べていた。
鬼のトレーナーさん達も今日ぐらいは大目に見てくれるはず、いや待てダメだ目が笑っていない。
『今日だけは見逃すが明日からは覚悟しておけ』という視線が痛い。
そんな風に周囲を観察出来る程度には落ち着きを取り戻したと自覚する。

逃げるようにステージを降り、壁と同化して周囲を伺うと、四方の壁には心を折られ艱難辛苦を味わっているであろうアイドルが何人もいる。

かくいう自分もその一人で、顔色の悪さでは彼女らより酷いかもしれない。

彼女達を慰める友人は自分と同列の５０位圏外かもしれないが、自分にそれをするのは今回の勝者達だ、彼我の格差はより一層惨めなことになるだろう。

基本的に感傷に浸るような柔な精神構造ではない筈だが、それでも今回は堪えた。

仲の良い友人達が、それも自分より後に事務所に入ってきたユニット仲間２人が、自分の両隣を抜けて階段を駆け上がっていったのだ。

歴史上、古今多くの芸術家、創作活動家が感じてきた焦りと苦悩を、身をもって感じていた。

その経験もまたかけがえのないものであるが、そうなっている事実そのものは自身の力不足。

全ての経験を糧にするつもりで居ても、心は幾度となく負の感情で上塗りされ、思考に黒い靄がかかる。

そうしているうちに一人、また一人と壁から引き剥がされ、人の輪に加わっていく。

その輪郭がどこか歪んだものであることを自覚するまでに、多少の時間を要した。

観察を進めるうち、近付くものが２つ。
潤んだ瞳で容姿を微細に捉えることは難しいが、実のところその必要もない。
それらが何かなどわかりきった事であるからだ。
だからこそ、勝者たる彼女達に言わねばならない事があった。
「…文香さん、マキノさん…おめでとう、ございます…！」
頼子は涙を拭い、今出来る最高の笑顔で親友２人を祝福した。

鷺沢文香と八神マキノは、涙に暮れる親友の姿に動揺した。面食らったと言い換えてもいい。
彼女と面識を得てから初めて見た涙だったからだ。
彼女らのよく知る古澤頼子は、冷静で穏やか、観察と表現をこよなく愛し、何より経験の全てを自身の糧とすることの出来る女性だった。
マキノは更に、頼子が文香に並々ならぬ好意を抱いていることも知っていた。
そんな彼女が、隠れるように涙を流しながらこちらを見つめていた。
だからこそ、彼女が涙を堪えて笑顔を作ったことに安堵した。
直後に彼女が人目を憚らず声をあげて泣き出すことにならなければ、その安堵はより

長く続いたことだろう。
泡を食わされながらも、ありがとうございます、泣かないでくださいと言う文香の声に嗚咽が混じり、二重奏になるまでに時間はかからなかった。
最後まで冷静だったマキノがどうにか2人を落ち着かせたが、彼女自身の目尻にも光るものがあったことは誰にも隠すことが出来なかった。

会場の中心部に今回の主役のうち2人が舞い戻ったとき、2人は3人に増えていた。
他の主役達の中にそれを拒むようなアイドルはおらず、むしろ一部はそれを面白がりながら、2人に手を引かれた古澤頼子を迎え入れた。
その後しばらくの時間を経て、状況は冒頭に戻る。
頼子が冷静さをようやく取り戻したとき、会場の喧騒と混沌は最高潮を迎えていた。
そして、その中心に自身がいたことに今更ながら困惑した。

かつて祝賀会だった宴会のお開きが宣言され人が少なくなった会場には、挨拶を残して寮の自室に戻っていく。
今年の勝者達も各々の友人や恋人たる同僚のアイドルと思い思いの夜を過ごすのだろう。

会場の片付けの邪魔にならないうちに、３人もお暇することにした。

３人の自室の中で会場から一番近い文香の部屋への道中、そこには静寂があった。春の夜の静けさの中、３種類の靴音がアンサンブルを奏でる。

３人の誰もが会話のとっかかりを探していた。やがて靴の１つが止まる。マキノだった。

「悪いけど、私はここで失礼させてもらうわ。

私にはまだ一番の難敵が残っているの。それも、誰かさんより余程小意地で面倒な娘が、ね。

それじゃあ」

クールな姿を崩さず、後ろ手で手を振りマキノは別れを告げた。彼女が２人きりにさせようと気を使っていたのは明らかだった。

二重奏に減った靴音が春の夜中に反響した。

文香の部屋は相変わらずの様子で、本棚と本の山の中に辛うじて生活スペースが確保されて（定期的に頼子とマキノが訪れ、休日丸々かけて本をどうにか片付けて確保して）いた。

否、本は案の定増えていたので悪化したとも言える。
頼子はテーブルに積み上げられた過去の台本や辞書辞典の山をそっと退かし、流しに逆さにしてあった柄揃いのプラスチックコップに水を入れた。
この間に部屋の主たる文香がしたことといえば、部屋の鍵を開けたことと所在無げに椅子に腰掛けたことぐらいである。
同時に水を一口、お互いが気の高ぶりを収めたと見て、頼子が切り出した。
「……まずは文香さん、改めてシンデレラガール、本当におめでとうございます…」
「…ありがとうございます…、私を応援してくださった皆さん、プロデューサーさんや事務所の皆さんのお陰です。何より…」
「私のお陰、というのはやめてください…。私は文香さんの活躍に貢献出来たとは思っていませんし、私を気遣っての事なら尚のことです」
「頼子さん…」
頼子は文香の表情を読もうとするが、他の相手ならいざ知らず、文香の思考だけはどうしても読みとれない。頼子の希望的な推理が混じる、惚れた弱みだ。
頼子にはどうしてここまで自分を気遣ってくれるのかがわからなかった。
実のところ、文香も何故自分が頼子をここまで気にかけているのか理解していなかった。今の今まで恋心というものを文字の中にあるものとしか理解していなかった弊害

である。

膠着した空気を打破したのは、文香の携帯だった。電話の相手は八神マキノ。縋る思いで電話に出る。

「…私よ。文香、スピーカーボタンを押して。わからないのであれば頼子に頼むことね」

「頼子さん、お願いします…」

ノータイムで渡された携帯に少し苦笑しながら、電話越しの指示に従う。

「これで２人共に聞こえるわね？

さて、私が推測するにそろそろ話題に困った頃で、変な事を口走らない様にお互いが沈黙しだしたのだと思うのだけれど」

見ていた様に推理を語るマキノに、図星の２人は小声で肯定する。

「まず、お互いの思いを確認することから始めましょう。

私の持つ情報を統合すると、頼子は文香の事が好きよね。聞くところによると、文香が事務所に入ってきた頃からずっと」

「……そうだったのですか…」

静かな問いに対し、小さく頷くことで肯定する。

自分のいなかって頃の情報まで持ち出すあたり流石の諜報能力である。

携帯の向こうでは言葉の矛先を変えて鋭い指摘が行われていた。
「対して文香、貴女が頼子の事を自分が思う以上に考えているのは、その感情が恋そのものだから。多くの物語で題材にされるそれの定義を、まさか貴女が知らないとは言わないわよね？」
必要以上に皮肉げな言い回しをするのは相手が3人の中で最年長の文香だから…というだけではない。
文香の方に自覚はないが、以前から彼女が同僚達から度々持ちかけられた恋愛相談が原因である。悩める乙女達の本音に対する彼女の答はどれも真摯で、詩的で……誰にとっても不幸なことに、その悉くが検討違いなものであった。
それの後始末にマキノ扮する謎の人物データ好きやその仲間映画好き、イチゴ好き他多数が毎度毎度奔走していたことも、文香には徹底して隠蔽されていた。
そんなこととは露ほども知らぬ文香であったが、それでもマキノの言葉の端々に険があることは少なからず感じとれた。
好意に対する己の鈍感さが周囲にどれだけ悪影響を及ぼしていたかを彼女は朧気ながら、本当に朧気ながら自覚したのだ。
「早い話、貴女達2人は両思いよ。そしてそれは、事務所の中では既に周知の事実。

文香を慕っている茜やありすも、頼子を想っていた晶葉や都も。２人だったら任せられる、自分の出る幕はないと口を揃えて言っていたわ。

これがどういう事か、わからない訳がないわよね？」

関係者の人数を増やして圧を高め、特に親しい何人かの名前を出して具体性を確保しておくことも忘れない。

理系、技術系アイドルと言われる彼女だが、意外にも論戦にも優れていた。

そんなマキノに対し、どれだけ語彙力や文法に長けていようとそれを論弁に活用する技能が文香にはなく、頼子も文香が関係する事象ではそれを発揮出来なかった。つまるところ、マキノの一方的優勢である。

２人はここで初めて、お互いが好意を向けていたことを認識しあう事になった。

「……はい、私は、文香さんのことが以前から好きです。」

「…わ、私も…頼子さんのことが好きなのだと気付きました…」

そして口に出した、これで勝負あったも同然であった。

もし仮に他の話題であったなら、頼子なら互角の展開に持ち込めたのだろう。

だが文香のことで頼子が勝てる相手はそう多くなく、数少ないその１人である文香本人ではマキノとは勝負にすらならなかった。

「さて……今ので2人が両思いであることはお互いが認めたと思うのだけど、後はそれをお互いが受け入れるだけ。

そしてそれに茶々を入れる程無粋でもないの。

いくらお節介焼きのユニット仲間といえど、私がやれるのはここまで……必要なら結婚式の神父役でもやってあげるのだけれど？」

それはマキノからの挑発であり、同時に最後の警告であった。

ここまでお膳立てされておいてまだ覚悟が決まらないのか、ここで意地を見せなければ今後どうなるか理解っているな、という圧を込めた問い。

その意味を理解した直後、2人はほとんど同時に言った、私達だけでやらせてください、と。

電話の向こうからは数秒の安堵めいた沈黙の後、努めて冷静に整えられた声が放たれた。

「私の配慮が伝わった様でなにより。後はご両人の好きにやって頂戴、それじゃあ」

そう言い残して通話は切断された。

2人の居る空間を再び無言が支配する。

退路を自ら絶った以上、言わないという選択肢は取れない。お互いを想っていること

も理解している。だが、きっかけがない。
こういった場合、往々にして人は感嘆詞で間をつなぐことを試みる。すなわち…
「「…あの」」
同じ言葉を同時に発するという、古典的かつ文学的なアクシデントが発生することがある。
「「……ふっ、ふふっ、あはははっ」」
その後の反応として文学的に多い行動は同時に笑いだすというもので、多分に漏れず彼女らもそうであった。
２人は笑う、自身の疑念を払い飛ばす為に。
２人は笑う、お互いへの愛を認めあう様に。
一頻り笑いが落ち着いた後、咳払いを挟んで切り出したのは意外にも文香だった。
「…さて、頼子さん。
あそこまでマキノさんに気を使わせてしまいましたし、いよいよ…こ、告白を、しなければいけませんね…」
照れて口ごもり、白皙の柔面を赤らめている、かわいい……ではない。
茹であがった思考を振り絞り、記憶を遡って活路を開こうと奮闘する。……そういえば。何かを閃いた頼子は、こちらも顔を赤らめながら提案する。

「……折角ですから、マキノさんが仰っていたように結婚式の真似事でもしましょうか……ジューンブライドには些か早いですが。」

これから恋人になる彼女の言葉に、文香は更に顔を赤らめながら頷いた。

ここは鐘が鳴り光差す教会ではなく、狭く埃っぽい文香の部屋。

神父も牧師も不在で、本棚に座る多種多様な本たちを除けば参列者もいない。

2人の花嫁はドレスはドレスでもパーティドレスで、汗と涙で折角の化粧も崩れはじめていた。

だがそれでも構わない。それらは2人の永遠の愛を否定するには遠く及ばない。

「……本当に、私からで良いのでしょうか。」

「大丈夫ですよ。私は文香さんに返事をして、文香が問い掛けた言葉と全く同じ言葉を文香さんに質問するだけですので。」

台本は宗教書関連の棚にあったものから文香が引用、手直しして5分と経たずに書き上げた。

頼子はといえば、携帯のカメラを起動して撮影を始めた。2人の記念を残すため、頼子曰く記念の絵の資料にするためだと言う。

映像を記念にするのではなく、絵のための中間材料でしかない辺りが頼子らしくて、

文香は笑った。

「……では、失礼して」

尤もらしく真顔をつくり、お手製の台本を手にした文香の正面に頼子。暇になった反対側の手で頼子の手を握り、誓約の言葉を綴る。

「……古澤頼子。

貴女はここにいる私、鷺沢文香を

病める時も健やかなる時も

富める時も貧しき時も

優った時も敗れた時も

恋人として愛し、敬い、慈しみ

互いに支えあう事を誓いますか。」

「はい、誓います。」

参列した本とカメラ、今までとこれからのアイドル人生に、そしてお互いに対し誓いを立てる。幾度の舞台を経ても忘れられない言葉で。

両者真顔のままポーズを交換する。手は少しでも離したくなくて、相手もそんな様子だったので真顔はすぐに崩れた。

一呼吸置いて再びの真顔で誓約を口にする。

「……文香さん、行きます。
……鷺沢文香。
貴女はここにいる私、古澤頼子を
病める時も健やかなる時も
富める時も貧しき時も
優った時も敗れた時も
恋人として愛し、敬い、慈しみ
互いに支えあう事を誓いますか。」
「はい、誓います。」
文学と絵画、彼女と自分を形作って来た全てのものに、そしてお互いのこれからの人生に誓いを立てる。幾度の年月が流れても色褪せない色彩で。

真面目腐った顔に耐えきれず、吹き出したのは果たしてどちらだったか。再び部屋を満たした笑い声が落ち着くのを見計らって、頼子は最後の提案を口にした。
「…さて、文香さん。ここまでお互いに誓いの言葉を交わしましたが、一般的に結婚式のクライマックスといえば、何だと思いますか？」
「……？　それは…、あっ」

頼子の問い掛けの意味を理解したとき、文香は今までにない程に顔が赤くなったのではないかと錯覚した。

周章狼狽し、呂律の回らなくなった彼女は両手で顔を隠し、

「……あの…目を、閉じていてもらえないでしょうか…」

そう言うので精一杯であった。彼女の顔を覆う両手を無言で抑えた頼子は瞼を伏せ、顔を近付け、そして、……

カチリ、ボタンを押す小さな音が事務所のラウンジに溶けて消える。

「…本当に、世話の焼ける人達ね」

電源を落とした盗聴用携帯電話を専用のケースに入れ、懐に放り込むと、マキノは椅子から立ち上がり脚を動かす。

案の定拗れそうになっていた2人を早くくっつけとせっつき、事務所1の大型未完成カップルに進展の兆しを作った陰の功労者は、更に自分の恋人を相手取る義務も有していた。

彼女の親友達にアイコンタクトで最後のフォローを譲られたマキノとしては、事務所でも一際面倒なパターンである文香と頼子のデータを獲られたことを人知れず喜ぶ。

いくらも経たずに目的の部屋に到達。一呼吸置き、ドアを静かにノックした。

「泉、入るわよ?」

返事より早く扉を開け、体を捩じ込むんで部屋に入る。

相手の行動パターンは親友2人からリサーチ住みであるし、何より恋人たる自分の経験則もある。

彼女の思考がまた何か変な方向に転がる前にどうにかしなければと、マキノは覚悟を決めた。

夜は未だ半ば、本音を打ち明けあうにはうってつけの頃合いだ。

彼女達の語らいは暫し続くことになるだろう。